九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「パルチファル」におけるleitの問題

西田，越郎

https://doi.org/10.15017/2332856

出版情報：文學研究. 57, pp.119-125, 1958-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

「パルチファル」における leit の問題

西田越郎

中世においてはすべての人間的意識が神と結合していることは改めて述べるまでもないことである。神が世界を、そして人間の運命を維持する。ただ「ニーベルンゲンの歌」においては、キリスト教的な表現が屢々見出されはするが、それは外面的な衣裳にすぎないのであつて、実はニーベルンゲンの主人公たちにとつては神は存在しなかつた。このような「ニーベルンゲン」は別として、一般にアルトゥス・ロマン (Artusroman) とよばれているもの、例えばハルトマン・フォン・アウエ (Hartmann von Aue) の「エーレック」(Erec) や「イーウェイン」(Iwein) などと、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ (Wolfram von Eschenbach) の「パルチファル」(Parzival) を比較するとき、われわれの注目を惹くのは何であろうか。それはおそらくヴォルフラムが宗教的なものに目を向けていることであろう。「エーレック」や「イーウェイン」に示された神と世界との結びつきに対して、ヴォルフラムのそれははるかに深い意義を有するように思われる。H・クーンの言を借りれば、ヴォルフラムはその作品「パルチファル」に religiöse Wirklichkeit を導き入れたということが出来るであろう。

「パルチファル」においては、主人公パルチファル個人の運命と、同時に彼と神との関係が描かれ、そこに神と人間とのつながりによつて世界の秩序が保たれていることが示されるのである。

さてこの壮大な叙事詩「パルチファル」にあらわれた神と世界の問題を以下に検討してみたいと思う。パルチファルはこの神と世界との満たされざる関係のために、悩みと苦しみとの中に置かれるのだが、彼がこの苦悩に対して如何なる反応をするか。パルチファルの苦悩 leit を辿りつつ、主にトレフリツェントとの対話を中心として述べることにしよう。

ヴォルフラムは、この叙事詩のプロローグにおいて、主人公パルチファルを指して er küene, tręclîche wîs (4,19) と云つた。すなわち徐ろに成熟するものとして描かれるのである。パルチファルの生いたちに始まり、さまざまな変転を経つつ、グラール王としての召命を受けることを以て極点に達するこの叙事詩の主人公は、数々の迷誤を重ねながら歩一歩前進し成熟してゆくのである。そのパルチファルの生涯につきまとつて離れず、いな、彼の運命に重大な影響を与えるものは、「悩み」ということであ

る。これは全篇を通じて読者の目を惹かずにはいない。悩みは一般に leit、あるいは屢々 riuwe という言葉で表現される。「パルチファル」においては、人間存在なるものの普遍的な悩み、罪ゆえの悩み、罪なくして受ける悩み等、全巻を通じて leit が大きなテーマとなつているのである。パルチファルは知らずして、何らその意志なくして他人を leit に陥れ、また自らそれにまき込まれ、その結果、更に人を leit に追いやる。leit は leit を産む、また leit を通して、leit を越えて喜びへ導かれることもある。パルチファルが幾多の leit を体験し、それによつて、それを克服してゆく過程、これが「パルチファル」の主要テーマなのである。われわれは、パルチファル個人の運命を通じて、神と世界の問題に対して与えたヴォルフラムの答をこの叙事詩に見出すことが出来るわけである。

先ず、作品に即しながら、パルチファルが如何なる leit を経なければならなかつたか、それを見ることにしよう。パルチファルに限らず、ここに登場する他の人物にも leit を見出すことが出来る。この叙事詩の第一巻、第二巻は謂わば物語の序曲として、パルチファルの父ガハムレット (Gahamuret) について述べている。アンシャウェ (Anschouwe) 国の王子ガハムレットは騎士として冒険を求めて東方へ旅をするが、やがて冒険の途上、裏切りの犠牲となつて異国に倒れる。彼が出会つた二人の女性、すなわち彼の妃たる黒人の女王ベラカーネ (Belakane) の別離の悲しみ、夫を失つた第二の妃ヘルツェロイデ (Herzeloyde) の傷心。愛する夫を奪つた騎士の冒険生活はヘルツェロイデにとつて仇敵に等しいものであつたから、愛児をこの仇敵から守るべく彼女はゾルターネの森に居を移したが、その願いも空しく、パルチファルは騎士の生活にあこがれ、アルトゥス王の宮廷をもとめて森をとび出してゆく。それを見送るヘルツェロイデは彼の姿の消えると共に、

dô viel diu frouwe valsches laz
ûf die erde, aldâ si jâmer sneit
sô daz si ein sterben niht vermeit. (128,20 f.)

その心臓は悲しみにひきさかれ、彼女は地上に倒れて息たえたのである。パルチファルはそれとは知る由もなく、後に隠者トレフリツェントの口からそれを聞かされることになる。彼は何らの意志、何らの罪なくして母を死に導いてしまつたのだつた。また天幕に眠る美しいイエシューテ (Jeschûte) に出会つたパルチファルは、母ヘルツェロイデの戒めを忠実にまもつて、彼女をよき婦人と思つてこれに接吻し、無断で指輪をもらい、そのために彼女は夫オリルス (Orilus) から不貞の疑を蒙つて虐待され悲歎に沈む。彼女には何の罪もなく、パルチファルがその愚かさの故に彼女を苦悩に陥れたのであつた。旅を続けるうちに、ジグーネ (Sigûne) なる女性に会うが、彼女は己がおごりの心から試合でうち殺された愛人シオナトゥランデル (Schionaturander) の亡骸を膝に抱いて悲歎の底に沈んでいる。これら三人の女性の leit はそれぞれ違つた型をあらわしているといえよう。

パルチファルはまた「赤い騎士」とよばれる剛勇の士イーテル(Ither)をわが身内とは知らずして、ナンテス(Nantes)城外に槍をもつて突殺す破目となつた。これまた知らずして leit を味わせたのである。更に騎士グルネマンツ(Gurnemanz)は三人の息子を失つたばかりか、それを歎いた妻まで死なせ、パルチファルをあとに残つた娘の夫にと望んでいたにも拘らず、パルチファルはそれを断つて冒険の旅を続ける。一方パルチファルはコンドウィラムール(Condwîramûrs)と結婚することになつたが、英雄的冒険に対する憧れと、まだ生きているものと思つている母を慕う心にかられ、束の間にして愛する妻に別れを告げて去るが、コンドウィラムールを苦悩に追いやつた彼自身、やがて妻への憧れの故に苦しみを嘗めることになる。運命の導きによつて彼はムンザルヴェーシェ(Munsalvæsche)なるグラールの城に辿りつくが、そこには沈黙の悲愁が支配し、騎士たちはすべて悲しみに沈んでいる。そして病めるグラール王アムフォルタス(Amfortas)の悲痛きわまる姿。グラールの王としてあるまじき行為の故に純潔を失つた罰として病める身とはなつたのである。アムフォルタスの苦しむさまを眼のあたりにしながら、パルチファルは遂に同情ある問いを発することが出来なかつた。彼はグルネマンツに教えられた騎士の作法を忠実に遵守したのだつた。無論同情心に欠けていたわけではなく、人間的共感にかられはしたのだが、zuht に従つて、問いを怠つたために、懈怠の罪を負うことになつた。アムフォルタスの病を癒やすことも出来ず、あたらグラール王となるべき好機を失つてしまつた。かくて彼はグラール王国の協同体から自らをしめ出してしまつたのであつた。これも先の母の死の場合と同じく、その時は知る由もなく、知らずしてアムフォルタスを初めとし、グラールの騎士たちをして苦悩せしめることになつたのである。かくしてパルチファルは協同体から呪いを受け、彼自らが最も深刻な悩みを悩むこととはなる。

今やパルチファルの上には恐ろしい不幸が吹きよせた。アルトゥス王の円卓に招ぜられ、円卓騎士として採用されたパルチファルのもとへ、饗宴の最中にグラール城の使者、醜いクンドリーエ(Cundrîe)が訪れ、アルトゥス王の面前で、パルチファルの列席によつて王の円卓の名声も地に落ちたと歎き、またパルチファルが一言も問いを発しなかつた無情を面罵して、「祝福を奪われ、幸運に見放されたものよ、汝の地獄に落つべき運命はすでに定まつた」と叫んだ。パルチファルは名誉をはずかしめられ、云い知れぬ苦悩に沈んだ。こうして彼はふたたびアルトゥス王の宮廷を去るのである。彼はかつて幼い好奇心から母にたずねた時の問い(119,17)を今、ふたたび繰返すのである。

……《wê waz ist got ?
wær der gewaldec, solhen spot
het er uns bêden niht gegeben,
kunde got mit kreften leben.
ich was im diens undertân,
sît ich genâden mich versan.
nu wil ich im dienst widersagen ;
hât er haz, den wil ich tragen.
friwent, an dîns kampfes zît

dâ nem ein wîp für dich den strît
(diu müeze ziehen dîne hant),
an der du kiusche hâst bekant
unt wîpliche güete:
ir minne dich da behüete!
ine weiz wenne ich dich mêr gesche;
mîn wünschen sus an dîr geschehe. »(332,1 f.)

ああ、神とは何か、神にもし力ありせば、かかる恥辱を加えることはしなかつたであろう。神の恩寵を望んだが故に、自分は神に従い、神に仕えてきた。だが、神への奉仕は拒もう、神が憎しみを抱くなら、自分は敢えてそれを受けるのだ…… パルチファルは、今や何の罪の意識もない自分にかかる残酷な処置が下されたのをみて、自分の運命が神の庇護の下にはないように思われた。もはや、かつて母が自分の疑問に答えて

sîn triuwe der werlde ie helfe bôt (119,24)

「真心をもつて常に世の人々をまもらせ給う」と云つた神を信頼することが出来なくなつたのである。彼は遂に神を見失うにいたる。今の場合、「神とは何か?」はかつて母に発したと同じ問いではあつても、すでにそれはあの幼い頃の単純な好奇心からではない。神への疑惑は神への反逆とならざるを得ないのである。かくしてパルチファルは、今や、神に反いても、己が独力でグラールを求めるため、アムフォルタスの悩みを救うために、また己が心中の疑いを解決するために、苦悩のうちに放浪の旅へとのぼるのである。

このようにこの叙事詩には、主人公パルチファルの変転に伴つてあらわれる leit が、数限りなく描かれているのである。

神にそむき、神と敵対関係に陥つた、いま最大の危機にあるパルチファルを、一転して迷いの覚醒へ、内的回心へ、神への随順・恭敬に赴かしめた転機は、聖金曜日に行われたパルチファルと隠者トレフリツェントとの対話である。これは第九巻にくわしく述べられているところだが、この叙事詩の核心となるべき重要な場面である。

パルチファルは四年半にわたる放浪にも拘わらず、彼の求めるグラールを発見出来ないでいる。今は清らかな目の光を失つたパルチファルには人生の意味がわからなくなつていた。

パルチファルはジグーネに再会する。ジグーネは愛人シオナトゥランデルの死の故に、俗世を捨てて、今は神に仕える身となつている。ジグーネとの再会を描く第九巻の冒頭は、主人公パルチファルの内面的転向を、すなわちパルチファルと神との新しい結びつきを用意するためのヴォルフラムの深い配慮であるように思われる。続いて行われるトレフリツェントとの対話にあらわれる転換は、一見唐突のようであつて、実はそうではないのだ。

さてキリスト受難の聖金曜日、パルチファルは、とある森の中

で遭つた老騎士から、今日のいかなる日であるかを教えられ、かかる日に甲冑に身をかためているのは神を冒瀆するものであると忠告される。だがパルチファルは、

《hêrre, ich erkenne sus noch sô,
wie des jâres urhap gestêt
ode wie der wochen zal gêt.
swie die tage sint genant,
daz ist mir alles unbekannt.
ich diende einem der heizet got,
ê daz sô lasterlîchen spot
sîn gunst über mich erhancte,
mîn sin im nie gewancte,
von dem mir helfe was gesaget:
nu ist sîn helfe an mir verzaget.》(447,20 f.)

自分は長い放浪の旅のために、今日が一年のうちの何時なのか知つていない、まして今日が聖日であろうとは思いもかけなかつた、自分もかつては神というものに仕えたのだ。だが神の恵みは自分に恥辱を与えた。それまでは神への信仰が揺いだことはなかつた、助けを与えると云われた神に自分は忠実だつた。しかし神の助けは自分には力を失つたのだろうか、と答える。しかし老騎士は神の無限の慈悲と誠実を信ずべき所以を説いて、森に住む隠者を訪れてその教えと慰めとを得よとすすめる。なおも老騎士の忠告に従わなかつたパルチファルではあるが、

ist hiute sîn helflîcher tac,
so helfe er, ob er helfen mac! (451,21 f.)

「もし今日が彼の救いの日ならば、もし救い得るものならば、われを救え」と彼がいうとき、そこにはパルチファルが隠者に向わざるを得ない内面的必然性があつて、ヴォルフラムはパルチファルをして、隠者への道をとらしめるのである。彼は馬に手綱をゆだねるが、それは神がパルチファルに如何なる加護を与えるかを試みるものともいうべきであろう。

神を見失つて、神に反抗するパルチファルはトレフリツェントに告白する。(456,29 f.)

《hêrre, nu gebt mir rât!
ich bin ein man der sünde hât.》

さてこの篇中最も重大と思われるトレフリツェントとパルチファルとの対話において悩みの問題は如何に扱われているか。

パルチファルが前記の如き告白を隠者になしたとき、sündeとしてパルチファルは何を見ていたのであろうか。彼はトレフリツェントの問いに対してこう述べている。(461,1 f.)

……《mir ist freude ein troum;

ich trage der riuwe swæren soum.
hêrre, ich tuon iu mêr noch kunt.
swâ kirchen ode münster stuont,
dâ man gotes erê sprach,
kein ouge mich dâ nie gesach
sît den selben zîten:
ich suochte niht wan strîten.
ouch trage ich hazzes vil gein gote;
wand er ist mîner sorgen tote.
die hât er alze hôhe erhaben:
mîn freude ist lebendec begraben.

「私にとつて喜びは夢となりました。私は悩みの重荷を負うているのです。師よ、更に申しましよう。神とたたえる教会や伽藍のあるところ、そこにあのときから、私の姿を見たものはありますまい。私は闘いの他に何も求めませんでした。また私は神に甚しい憎しみを抱いています、何故なら神は私の憂いを払つてはくれず、憂いをいや高いものになし給うたから。私の喜びは生きながらにして葬られたのです」

このパルチファルの悩み、そして彼の考える己が罪に対してトレフリツェントは何と答えるか。

パルチファルの問いをきいた、トレフリツェントは、パルチファルの運命を充分に理解した、何故ならトレフリツェントは悩みに生きた人間なのだから。彼は、パルチファルの個人的運命にはふれずに、次のように語る。(462,22 f.)

er hât vil durch uns getân,
sît sîn edel hôher art
durch uns ze menschen bild wart,
got heizt und ist ein wârheit:
dem was ie falschiu fuore leit.
daz sult ir gar bedenken.
ern kan an niemen wenken.
nu lêret iwer gedanke,
hûetet iuch gein im an wanke!

「神はわれらのために多くをなし給うた、何故なら気高き神の子はわれらのために人の姿となり給うたのだから。神はまことに真理なのだ」

そしてトレフリツェントはここでキリスト教における救済の歴史を物語ることによつて、人間の不誠実に対する神の誠実について語るのである。

またトレフリツェントのいう迷い zwîfel について考えてみよう。既にヴォルフラムは「パルチファル」の冒頭において zwîfel にふれている。(1,1 f.)

Ist zwîfel herzen nâchgebûr,
daz muoz der sêle werden sûr.

この場合 zwîfel はいろいろに解釈されるであろう。本来の意味、すなわち innerliche Unsicherheit と解することも出来るが特に神の救済に対する信仰の動揺と考えられる。また母ヘルツェロイデが幼いパルチファルに対して、悪魔と zwîfel とを強くいましめたことも想起される。

パルチファルが意識して犯した sünde、すなわち神への反抗、教会の放棄、喜びを悲しみに取換えたこと、この三つの sünde を、トレフリツェントに対する告白のうちに認めることが出来るであろう。これらの sünde はいずれも傲慢、神への誤つた考えから生じたものである。さればこそ、トレフリツェントの答えは神とは何かということに向けられたのである。かくして隠者の教えによつてパルチファルの zwîfel は除かれ、傲慢、自負より解放されて、彼の心は謙譲と神への誠実に充たされることになる。

さてここで注意しなければならぬことは、この後でトレフリツェントがパルチファルの罪として三つのもの、すなわちパルチファルと別れて後、悲しみの余り襲つた母ヘルツェロイデの死、イーテルの殺害、そしてグラール城における問いの懈怠とを挙げていることである。これら三つのものは、既に述べたように、パルチファルの行為そのものからすれば、いずれも Schuld とは解せられないものである。いずれも、彼が何らその意志なくして行つたことである。殊に問いの懈怠については彼自身の考えがはつきりと次のように述べられているのである。(239, 10 f.)

durch zuht in vrâgens doch verdrôz.
er dâhte《mir riet Gurnemanz
mit grôzen triuwen âne schranz,
ich solte vil gevrâgen niht.
waz ob mîn wesen hie geschiht
die mâze als dort bî im?
âne vrâge ich vernim
wiez dirre massenîe stêt.》

問いの懈怠を含めた三つのパルチファルの行為が罪とされるか否か、これは従来問題とされてきたところであり、特に問いの懈怠については多くの解明がなされてきた。それら諸家の説についてはここでは触れないが、ただ er küene, træclîche wîs なるパルチファルの心がまだ十分に熟していなかつたとは云うことが出来るであろう。(未完)